

ヘルムート・ケーニヒ：19世紀前半におけるフリードリヒ・フレーベルと 小市民民主主義の結びつき 第三部

人文学部 教育・臨床心理学科 教授 勝 山 吉 章

6. 市民的もしくは小市民的女性運動における女性解放論議と関連した幼稚園女教師の養成

「カイルハウ、1848年6月16日金曜日の朝」の日付けで、ベルリンのフレーベル遺稿集には、「最も尊敬された、高貴な、ドイツ女性」という見出しのある草案がある。それは、「フレーベルの政治的見解と活動」の章においてみたように、「フレーベルの学校政治的・教育的活動」に関するアピールとなり得る。フレーベルは、ここでは、「ドイツ女性協会（deutsche Frauen-u. Jungfrauen-einigung）に対する大変な感動」故に、女性に期待している—それは、「常に内的に確固として、明瞭に表れ、外的にもフレーベルの承認」を求める女性協会の活動だ。この「女性協会」は、フレーベルによれば、「全身全霊を込めて、人間と国民の教育のために、我々ドイツ民族の教育ために全く献身している男性や若者たちの活動」をフレーベル自身の活動と同じく支えているという。

「このように、女性による人間教育の、子どもを発達に即して教育する職業に感激して、感激しながら成し遂げることのなかに、子どもが自らの純粋な心情の聖域において素晴らしく表れるように、高度な存在への、とりわけドイツ民族やドイツ国民のように、そもそも再生され新しく生まれ変わった人間の高度な発達段階への、目標達成のために欠くことの出来ない諸条件が存在する」とフレーベルは述べた。

この文書は、革命によって強化され表出された、女性の解放と女性の同権を求めた市民的、とくに小市民民主主義的女性運動における論議にその地歩を占める。これらの活動は、しばしば自由信仰教団に由来するか、少なくともその個々のメンバーやグループによって支持された。

19世紀前半の産業革命によって、「家父長家族」が崩壊した。

このような家族形態は：

女性の大多数に、生活費と生き甲斐を保障していたが、次第にその機能を消失した。そして、経済的景気循環や危機が、社会的な不確実性を広めた…手

工業親方から大店の商人まで、昨日まではまだ確かな家族だったものが、経済的破滅の亡霊に脅された…家父長的な両親の家は、まだ、ビーダーマイアーの時代は、全ての構成員に安心や信頼や保護を与えたが、未婚女性や、夫婦仲が悪くなって離婚した女性にとっては、居心地の悪い、冷たいものになっていた…まずは数千人の、しかしすぐに数百万人の女性が、数十年にわたって緊迫してきた問題に直面した。つまり、いかにして私たちは、明日の生活費を確保できるの？ いかにして私たちは、人生に満足することができるの？（「19世紀中頃から1918年11月革命までの女性の書簡集」1918、より）

フレーベルも「家父長的家族」の没落を認識していた。彼の最も有名な社会批判の論考「1836年は生命の革新を要求する」で彼は、教育学的視点から、家族はもはや期待された役割を果たすことが出来なくなったと強調した。

この状況を変革するためのフレーベルの活動は、次のことに向けられた。家庭のなかでの教育を改善すること。家庭教育をとくに幼稚園での社会的教育を通じて補うこと。そのために必要な人材—市民的家庭における子どもの養育者や、幼稚園の幼稚園女教師—を、計画的に、組織的に育成すること。それによって、上述した未婚女性や離婚女性といった女性の職業教育（Berufsausbildung）としての幼稚園女教師養成に彼が尽力したことは、高い価値をもち、それ故、成長しつつある市民的、とくに小市民民主主義的女性運動に注目された。このようなフレーベルの計画は、そもそも女性解放や女性の同権をめぐる論議の構成要素となった。フレーベルのこれらの活動は、彼の思想に大きな限界があったとしても、教育史研究がまだ十分に明らかにしてこなかった歴史的な功績をもつ。まずは、私たちの社会史において、幼稚園女教師という職業におけるフレーベルの相当な認識を、適切に具体化しよう。

このようなフレーベルの姿勢の根源に、大きく遡ってみる。ヘンリエッテ・シュラーダー＝ブレイマン（Henriette Schrader-Breyman）の自伝を書いたマ

リー・J・リシンスカ (Lyschinska) が、女性解放をめぐる論議を、すでにカイルハウ時代にみていたことは、まったく正しい。

カイルハウでは、一所懸命に活動している若手たちは、まさしく精神的な結びつきを感じており、彼らはフレーベルの精神を担い、フレーベルの精神によって結びついていたのです。彼の精神は、長年にわたって仲間内で生き、宗教、教育、女性解放、芸術と政治といった大きな世の中の問題に対して、確かな社会的態度表明へと導いたのです。（「ヘンリエッテ・ブレイマン伝」1927、より）

既に1848年革命前に最初の女性協会が設立され、女性によって編集され出版された機関誌があり、様々なジャンルで女性著者たちが、女性解放に尽力した。この動向に、フレーベルは、株式会社として宣言し、1840年に設立した社会改革的作品「ドイツ幼稚園」をもって加わった。この幼稚園を彼は、「ドイツの婦人と女性による教育活動実施のための協会」と名付け、もちろん、男性も参加できるとした。

既に1839年、イエナのルイゼ・マーレツォル (Louise Marezoll) は、自ら編集した「女性新聞—女性のための女性による娯楽紙」の1839年12月の142号と143号において、感激した言葉で自ら書いた記事を公表した。「フリードリヒ・フレーベルによって、ルードルシュタットのブランケンブルクに設立された幼児 (Kind) と子ども (Jugend) の作業衝動を育む施設について一言」。しかし、まず、革命期にフレーベルは、自らの理想の実現の可能性を、婦人や女性との連携から、家庭や幼稚園における幼児教育の共同活動に移したようだ。まさしく女性運動における最初の民主的活動家、「48年女性革命家」、ルイーゼ・オットー・ペーターズ (Louise Otto-Peters)、マルフィーダ・フォン・メイセンブルク (Malvida von Meysenbug)、エミーリエ・ビュステンフェルト (Emilie Wuestenfeld)、彼女らを後に考察するが、彼女らがフレーベルの思想を受け入れ、彼の活動を支持したことは驚くにあたらない。

当時の市民的もしくは小市民的女性運動と同じく、フレーベル集団における意見表明や議論には、女性解放や同権化に対する広範で多様な見解や活動があった。それらは次のような訴えを含んだ。女性が社会を支えている役割がまだ認められていない。このような女性の地位の原因に関する激しい疑問。夫婦における夫と妻の関係に関する非難。それは、確かに、妻の夫からの経済的独立性を前提とするが。さらに、公的に表明された女性の教育の機会均等や、「女子高等教育機関」の立案と創設の要求。

このような意見から最終的に結論付けられることは、

フレーベルは、自らの幼稚園と、そこから生じる幼稚園女教師養成によって、たしかに、唯一ではないが「真の」女性解放と同権化に向けて重要なステップを踏んだということだ。

このことを、最も明瞭に言ったのが、ヘンリエッテ・ブレイマン (Henriette Breymann) だった。ルードルシュタット集会の最中に、彼女はまったく次のように記した。

以下のことは私の心を幸せにしてくれました。フレーベルとミッデンドルフは、他のたいていの男性とは女性観が全く違ってました。彼らは私たち女性を、結婚以外にも子どもの養育者として尊敬される地位を与えるに十分に価値あるものと見なしました。私たちは未婚でも、人間を高貴なものに高めることに理解と自覚をもって働くべきなのです。私たち女性は、私たち自身にとっても価値あるものであり、そうなることができるのです。（1848年1月の母への書簡）

1850年にマリエンタールで行われた女性解放に関する議論の詳細が、フレーベルの同志だったルドルフ・ベンフェイ (Rudolf Benfey) によって論説として書き記されたのは、それから16年たってからだった。彼は同時に、この問題に関するフレーベルと同志たちの見解に大変興味深い洞察をくわえている。

ベンフェイ以外にこの議論に参加したのは次の通り。フレーベルの弟子たちがいて、そのなかで、ヘルミーネ・ディースターベーク (Hermine Diesterweg) だけが発言した。1851年6月9日にフレーベルと結婚したルイーゼ・レフィン (Luise Levin)。当時、娘と一緒にフレーベルの養成課程に参加したオットイリーエ・シュミーダー (Otilie Schmieder)。さらにヴィルヘルム・ミッデンドルフ。アルヴィーネ・ミッデンドルフ (Alwine Middendorff) と婚約したヴィヒャルト・ランゲ (Wichard Lange)。教員ゾーストマン (Sostmann) とフレーベル自身。シュミーダーとベンフェイと、ある意味ヘルミーネ・ディースターベークも、ベンフェイの見解によると、「女性解放論者」。一方、ランゲやゾーストマンは、女性解放論に反対する強固な国粋主義的 (nationalistisch) な態度。その他は、多かれ少なかれ、中間的立場。この議論の経過を再現しなくても、ベンフェイの証言のいくつかを見れば、いかに女性解放論がフレーベル集団で熱心に議論されただけでなく、いかに女性解放論が直接フレーベルの意図や活動に関係したかが分かるだろう。

女性解放論者は、総じて、ベンフェイによれば以下のような見解を主張した。

女性は、我々の時代、その存在の核心において騙されている。女性という存在の基盤であり、王冠であ

る「愛」は、社会の制度によって阻害されている。「婚姻」は、愛という聖なる財宝の守護者であるべきなのだが、たいていは、錢勘定に貶められている。「財産上の結びつき」は、ただ、女性を従属的にするだけだが、大事なこととされ、大切な「身体的生活と精神的生活の結びつき」は、どうでもいいことにされた…これらのことを救済できるのは、今日の社会制度を破壊し、新たな建設をはじめめるラディカルな手段のみである。(ベンフェイ「フリードリヒ・フレーベルと女性解放」1866)

O・シュミーターは、この考えを確認した。

私たち女性は、いまの社会の地位において、最も冷遇されています…自ら職業を選択し、夫に依存せずに、生活の糧を得るために真面目に働いている女性に対して、上流社会では嘲りの目で見ていてはいませんか — 私たちは、まず、被造物である尊大な男性に尽くさねばならないというのです…言語道断な状態が形成されているのです。(同上)

ヘルミーネ・ディースターベークは、次のような言葉で、この考えに全面的に賛成した。

そうですとも。このような尽くせと言う考えには腹が立ちます…私たちがそう考え、そう感じるなら、まずは、私たちが置かれている状況の全てをきちんと観察すべきです。自立したいという感情が出て、それは、抹殺されるか、破棄されて歪められてしまいます。この不幸を取り除くことができるなら、女性には全く別の運命の花が咲くでしょう！(同上)

シュミーターの返事はこうだった。「それは、取り除かれるのです。それが、まさしく私たちが女性解放と理解している意味なのです…」。ベンフェイは、歴史的な補説で、その時々女性の地位を浮き彫りにし、論議の途中で、解放の原則を聞いたフレーベルの問いに答えた。

女性解放は、人類を前世紀の半ば以来、支配している民主的世界観の現れなのです…そして、私たちが愛そうと、憎もうと、そういうものとして受け入れられているのです。— ありのままの人間性を得ようとする、とくに、宗派や国籍といった諸々のことから生じる所与の制約を取り除こうとすることは、時代の流れなのです。この動向は、いまやもう、多くのところで勝利を収めつつあり、もう少しで勝利を得るのです。(同上)

ベンフェイによれば、この事業には、たった一つの視

点からのみ向き合うことが出来るのである。

女性は、ただ単に女性として見なされるのではなく、あらゆる権利を与えられた人間社会の成員として自覚し、男性と同じ義務を果たすものであり、また同じ権利を受けるのです。— 全ては、この「唯一」の原則にあるのです。(同上)

反論したのは、ランゲである。彼によると：

女性解放は作り事であり、現実の生活に何らの根拠をもたない文学上の物語りの影響を受けているに過ぎません。G・ザントですが…だから彼は、馬鹿げたフランス社会からほんの小さな真実を受け取り、それを、多くの自らの虚構とごっちゃにしてみました。そして、我々の北ドイツの彼の馬鹿な信奉者は、我々に対して、真のドイツの根本をつくるシステムを建設せねばと信じているのです。(同上)

ゾーストマンは、すぐさま「同意見」だと次のように続けた。

そうですとも。私は、本当にまったく半分怒り、半分は呆れて、1843年から48年にかけてベルリンを走り回ったこのような考えのばかばかしさを振り返らねばなりません…この無益な哲学の腫瘍は、青年ヘーゲル派で育って、フランスのロマン文学で病的に太ったようです。そしていまや、そのいかがわしい建物のなかから馬鹿げた女性を引きずり出したのです…だから、まったく支離滅裂で…このような無意味なことは、ようやく終わりを迎えた時期でした。(同上)

ベンフェイは、このような意見に負けてなかった。彼は述べた。「まあ、たぶん…そのような意見そのものにおかしさがあるのではなく、このような愚かなことを生真面目に推進している国家に、おかしさがあるのです」。

ルイーゼ・レフィン、女性解放という政治問題を、教育問題に還元しようとした。だが、その際、ヘルミーネ・ディースターベークから断固とした拒否にあった。

万人の心に強く深くしみついているこのとてつもない葛藤を、ただ教育問題として解決しようとしても駄目ですよ。婦人として生まれたことを不幸と思ふべきだとか…単なる人間の風刺画だとか…いろいろですから。(同上)

シュミーターは、それに対して「解放論」の代弁者として、教育問題を女性の同権を目指す闘いのなかに組み

込ませようとした。そのためにはあらゆる社会的制約があったとしても、彼女の見解によると、「全く新たな女子教育の方法や、生活のためのそのポストが…生じるでしょう。青年期からも青年と同様に、女子は生きるために教育されるのです」。

フレーベル自身は、自らの幼稚園制度の考えと、それに必然となる幼稚園教員の養成を、徹底的に社会的政治的観点を考慮して、同時に、女性に規定される生物学的機能から女性解放に織り込もうとした。

女性の状態が変わらねばならないことは正しい。だが、どこからはじめていいのかわからない…いま、女性たちに欠けていることは、他でもない。職業と自立を通して相応な地位を人生に築くことが出来るというセンスである。女性は自立できることを知らねばならない。「ただの女性」から「真の人間」へと脱皮してはじめて、女性は自らの脚で立つことができるのである。(同上)

彼は、解放論者に対して、彼らが母としての女性の生物学的機能、そこから「女性の根本的職業」が生じることを見落としていると非難した。

女性が、各々の職業訓練をはじめるとあたって、その本性的な職業つまり女性教育者として最初に育たなかったならば、彼女の人生は未完のままで終わる — もちろん後に彼女らが、他の職業、例えばスイスの時計職人など他に望む職業に就こうとするならばそれは容易だ — だが、女性教育者には全ての人になれるのではない — この根本的な職業をまず習得しなければならない、そうしないと失敗する。(同上)

だから彼は、「堅信礼を終えた全ての女性に、幼稚園に附属された幼稚園女教師養成コース」を勧めた。ベンフェイによると、フレーベルは1852年になお、「性差別は、それが正当な根拠をもっているから生じるのだ」という見解に反対した。

1849年の春から、1851年の夏までの時期は、老いたフレーベルにとってますます大きくなる騒乱の時期だった。

1849年8月の終わりに、ヘンリエッテ・ブレイマンは次のように書いた。「フレーベルの予定を尋ねてごらんさい。私が言いたいことは、彼は自分では全く予定はないけど、他人は彼に多くの予定を組み立てています。人々は、彼を三箇所に来させようとしています。マイニンゲン、そこで彼はちょうど、何度もマリエンタールに来るように言われましたが、あとワイマールとハンブルクです…神様はご

存じなのでしょう。どこで、どのようにして、いつ、彼の理想が実現されるのかを」。

この問いかけは、不当ではなかった — 上述した三箇所と並んで、なお、ドレスデンとベルリンが会話にあがった。フレーベルは、1849年5月にドレスデンでの養成課程を終えて、バード・リーベンシュタインに引越した。そこで彼は、「発達に即して人間を教育することによる全面的な生命合一のための学校」で、ささやかながらも幼稚園女教師を、彼によって設立された幼稚園を関与させることで育成しようとした。革命が失敗してフレーベルは次のように考えた。1848年に彼の友人であるシュタングエンベルガーやフリードリヒ・ホフマンにとにかく語ったような、彼の偉大な「民族と国民の教育計画」は、もはや実現されないだろうと。この提案と、否、そもそもヘルバ＝プランと結びつけてフレーベルは、いまや、少なくとも1847年来、あたため続けてきた考え、つまり、幼稚園女教師のための養成所をつくること、幼稚園をもっと普及させること、女性協会を設立してこのような計画を支持してもらうことの実現の可能性を模索した。

このようなフレーベルによって発展させられ、彼の同志たちによって擁護された構想は、女性解放への「一つの」貢献だったし、それ故、市民的ないし小市民民主主義的女性運動によって取り上げられ支持された。

彼の友人で、1849年の夏にバード・リーベンシュタインに滞在したディースターベークのゲーテ財団に対する計画は、多くの点でフレーベルの意に沿うものであった。

まず第一に。ディースターベークは、ゲーテ生誕100周年を機に、ゲーテをいわゆる具体的なもので祝祭する意見に賛成したから。フレーベルは1817年にルターの顕彰および1840年にゲーテンベルクの顕彰で「具体的な記念碑」を設置したが、ディースターベークのこの考えは、十分にフレーベルの考えに一致した。第二に。フレーベルの遺稿にあるディースターベークのもともとの手書きの構想は、フレーベルのものと非常に近かった。ディースターベークは、(フレーベルの原理に従って)「真・善・美のために全ドイツの青少年を教育するワイマールの男女教員による教育舎」を創設する「ゲーテ財団」という構想にしたがって、三つの部門を計画した。

第一部門。幼稚園女教員養成のための教育舎。

方法a) 理論：フレーベルによる授業。

方法b) 実習：幼稚園女教員がいる幼稚園。

第二部門。教員養成学校。

方法a) 理論の授業。

方法b) 実習：尋常男子小学校。

第三部門。女教員養成学校。

方法a) 理論の授業。

方法b) 実習：尋常女子小学校。

たぶん1849年1月の終わり、ヘンリエッテ・ブレイマンは、フレーベルの計画について、バード・リーベンシュタインへの彼の移住に関連して述べたが、その計画はおそらくディースターベークの構想に影響した。第三に。フレーベルは、まさしくディースターベークが「ゲテ財団」を、彼の教育原理にしたがって構想してくれたことに感激したことは間違いない。このような大胆な計画は駄目になるにちがいないと思っても、フレーベル自身は、ディースターベークの親愛に満ちた考えに感激したに違いない。ディースターベークの考えによると、「ゲテ財団」は、「女性の全面的な教育のためにワイマールで設立されたアカデミー」のなかに、つまり「技能を伝授する学校」を附属にもつ「女子アカデミー」のなかにあるべきとされた。

ディースターベークの小冊子によると、この教育舎は以下の構造をもつという。

1. 思春期の女性のための、身体的精神的教育に関する教員養成校。
2. 子ども(男児女児)の最初の教育者としての母や子どもの養育者たるべき素養を育てる教育舎。
3. 女子尋常小学校と結びついた女教師・女教員養成校。
4. フリードリヒ・フレーベルの原則にしたがった幼稚園。様々な教育段階の要求や必要に応じて…財団の最初で最後の部門は…
5. 技能の学校。

フレーベルの遺稿から見つかった文書からも明らかのように、ディースターベークによってはじめられ、上述した小冊子で要約された「ゲテ財団」の計画は、両者の共同の仕事と見なされるに違いない。

「ゲテ財団」の計画は、様々なかたちで宣伝された。ディースターベークは、例えば、1849年9月にこの計画を「国民新聞」で説明した。たいていは、出版社の機関誌やピラで広められた、この計画を支持する女性協会設立への「呼びかけ」を通して起こった。だから、とくにルイーゼ・オットーは、自らの「女性新聞」の11/12月号で、記事「ゲテ財団。女性へ参加の呼びかけ」を公表した。「1849年10月3日チューリングゲンから」と、場所と日付を示した二つのピラ「ゲテ財団。とくに女性への参加の呼びかけ」がある。そこには一人の女性による署名が例としてある。本文が同じ「呼びかけ」の著者が誰であるかは、一たつた一人か、複数かが重要なのだが一なお明らかではない。1849年10月13日のバード・リーベンシュタインからの手紙でフレーベルは、グロッセンハインの「女性新聞」の編集者に、ハンブルクのヨハンナ・ゴールドシュミットから送られた別刷りを重版するにあたって、注意を促した。

さらにピラが、「時代に即した、とりわけ女性の教育と訓育を実施するために団結することに向けたドイツの婦人と女性への呼びかけ。一人の女性から」と題して表れた。

この呼びかけは、最初の構想からディースターベークの冊子までのゲテ財団の計画に関する正確な知識によって際だっている。

上述した計画に関して正確な知識とは、以下のことから自明となる。つまり、教員養成に関するディースターベークの提案(「呼びかけ」では、「教員養成ゼミナールでは、全ての養成課程で、フレーベルの方法に従い、同様に初等教育を行う能力が与えられる)や、他の「部門」がほとんど文字通りに、ディースターベークの冊子から引き継がれているのと同じく、孤児の受け入れに関する1849年初頭のフレーベルの思想が考慮されている。だが、すでにここで、補足において反民主主義的傾向が明らかになる。例えば幼稚園についてこう言う。「富裕で授業料を支弁する階層にとっては、クラブハウスと同じようなものになるだろうし、同時に、他の時間帯は、貧しい子どもたちのために、無料でサービスがなされるだろう…」。このような、小市民民主主義的な見解にほとんど相応しない傾向が、「国民幼稚園」で示された機能において一層明瞭となる。

私たちは、ほんとに、私たち自身の子どもの面倒をみなければならないだけでなく、母親が重労働で、日々の家族の面倒をみるのが困難な子どもの養育や教育にも専念しなくてはならない。このような子どもたちのために国民幼稚園は…既存の保育所と連携して、大衆の下層で、法や秩序に慣れ親しむ健康で有能な、また、今日見られような、革命的騒動や紛擾に誤って参加するようなことがなく、早くから自分の稼ぎで貧困や困窮から身を守る用意をするような世代を育てる手段を与えねばならない。

ここにおいて、明らかになることは、後に農業資本家に成長するユンカーや、彼らとの同盟を模索するブルジョアが、既存の資本主義的社会秩序の維持のために幼稚園の「有益性」を見通していたことである。ブルジョア的社會主義に合致した一般的な性向を、言動と行為において正確にみるなら、著作者としてのベトラ・フォン・マーレンホルツ=ビューロー男爵夫人が浮かび上がる。彼女は、1849年にディースターベークと同様にバード・リーベンシュタインに滞在して、フレーベルと最も親密な親交を結び、自らの立場から幼稚園の設立に貢献しようとした。彼女はまた、1849年6月29日のブレイマンの書簡によると、「マイニンゲンやワイマールの公爵に、私たちの計画のために働きかけてくださった」ということだ。

さらに「1849年11月の一人の女性によるドイツ女性への呼びかけ」で、ディースターベークは注意メモを添えた。

この前のレポートの印刷が遅れています。そしてその間、ゲーテ財団の目的が委員会によって違った意味で述べられました。それだけに今、一層必要なことは、「自立的な模範学校」の設立を、あらゆる方法で促すことに全員が参加することなのです。

ワイマールのゲーテ財団の計画は、ザクセン＝ワイマール＝アイゼナハの世襲公爵と彼の妻が、フレーベルと彼の教育システムに好意を表明したのだが失敗した。

女性協会 (Frauenverein) の申し出によって、リーベンシュタインのフレーベルと、チューリッヒの彼の甥カールは、カールの妻ヨハンナとハンブルクにいった。当地でフレーベルは、1849年の11月から1850年5月の初頭まで、カールは彼の妻と一緒に、1849年の11月から1851年5月の初頭まで活躍した。ディースターベークは、1850年4月の終わりに約14日ハンブルクに滞在して、1851年に「ライン教育新聞」で、「ハンブルクの女性教育協会」と題して、この両フレーベルの活躍について報告した。ディースターベークは一つの立場で、この協会の誕生と発展について、この記事の序文で注釈した。

知人が私に述べたように、この歴史的な記述は全く正しくないかも知れないし、今やもうそうでないかも知れない。このような状況は後世に何らの影響を与えないので、私はあり得る歴史的な訂正は他者に委ねよう……

1850年6月14日に、フレーベルに宛てた書簡でまたディースターベークは、何が彼をこのような注釈に内容と形式にしたかが一突き動かしただかを説明した。

ハンブルクの女性たちは、非常に私に立腹しています。彼女らは、私がハンブルクの幼稚園や高等専門学校について書き、ピュステンフェルト夫人について述べた記事に不満なのです。ゴールドシュミット夫人はそのことで怒って私に手紙をよこしました……女どもは、最終的には男性を専制したいのですね。馬鹿げたことだ。

ハンブルクの女性たちの怒りの理由は次のことから類推できた——問題だったのは、ハンブルクの「女性教育協会」などではなくて、当地の「ドイツ女性協会」だった。それは、当時の女性解放を目指す女性運動の最先鋭集団の一つで、幼稚園や幼稚園女教師養成に関するフレーベルの思想、カール・フレーベルとヨハンナ・フレー

ベルの、フレーベルの考えを基盤にした、附属幼稚園をもつ「女子高等専門学校」設立の計画を、女性解放の重要な要素と見なしていた。1847年、この協会は、そのなかではキリスト教信仰とユダヤ教信仰をもつ女性たちが結集したが、「自由信仰教団」の一組織として発足した。この協会は、とくにドイツ・カトリックのリーダーだったヨハネス・ロンゲの影響下にあった。ルイーゼ・オットー・ペテルス (Louise Otto-Peters) がロンゲの熱烈的なファンだったように、既述のエミーリエ・ピュステンフェルト、ベルタ・トラウン (Bertha Traun) といった協会の幹部がそうだった。協会の個々のメンバーや、専門学校の女学生は、一人一人の後の成長が示すように、小市民民主主義的政治的見解を代弁していた一名前をあげた人物と並んで、例えば、ベルタ・トラウンの姉妹、マルガレータ・メイヤー (Margaretha Meyer) および女性の同権のための最も有名な先駆者マルヴィーダ・フォン・メイセンブーク (Malvida von Meysenbug) がいた。これら全ての女性たちが、フレーベル思想の熱烈的な支持者だった。

ハンブルクで一時的に、幼稚園や幼稚園女教師養成のために活動するというフレーベルの計画は、遅くとも、「ドレスデン養成コース」の時期に生じた——ヨハンナ・ゴールドシュミットに宛てた1849年3月17日のドレスデンからのフレーベルの書簡では、「ハンブルク」計画が述べられている。1848年以来、幼稚園を設立したハンブルク人とは多様な結びつきがあった。ハンブルクで女学校の校長だったドーリス・リュッケンス (Doris Luetkens) は、1848年にルードルシュタット集会に参加し、幼稚園を訪問し、自らの女学校に幼稚園を接続させた。ドレスデンで彼女は、ヴィルヘルム・ミッテンドルフの娘であるアルヴィーネ・ミッテンドルフ (Alwine Middendorf) を、この幼稚園の園長として獲得した——アルヴィーネは、後年、フレーベルの著作集の最初の編者となるヴィヒャルド・ランゲと結婚した。ドレスデン養成コースでは、ハインリッヒ・ホフマン (Heinrich Hoffmann) も参加したが、彼は、1849年夏にハンブルクでW・D・バイト (Beit) と同じく幼稚園を設立した——ホフマンのところでは、フレーベルの意向で、ヘンリエッテ・ブレイマンが働くことになっていた。バイトのところでは、フレーベルの推薦で、1849年2月から4月までアマーリエ・クリューガーが働いた。

だが、差し当たって、計画されたハンブルクでのフレーベルの滞在には、留保があった。そのことを知ることは、後のフレーベル思想の受容をより正確に評価するにあたって、重要でないことはないであろう。ヘンリエッテ・ブレイマンは、1849年3月22日に、ドレスデンからルイーゼ・レフィン (Luise Levin) に宛て次のように書いた。

おじさまは、徹底して公的な生活は似合いません

…彼は、ただの一度も、自らの思想の一部を詳しく説明することが出来ずにいます…先日、彼がまたここ教育協会で行ったような講演によって、彼は幼稚園の問題を、まったくダメにしてしまいます…フレーベルは全く上手な話し手ではありません。だから、ハンブルクのような都市の人は非常によく見かけるのです…ここドレスデンでフレーベルに出会うと、最初はハンブルクのようなことになるでしょう。フリートナー (Fliedner) (就学前教育に関する正統派信仰の代弁者—筆者—) の一党が、彼を激しく攻撃するでしょう。あなたと私は、フレーベルがキリスト教徒だと知っています。でも、彼の言葉で判断し、たぶん判断するしかない人は、彼を非難します。いえ、彼らはフレーベルに対して全く間違ってしまうのです。というのも、彼自身が、宗教的見解ではしばしば矛盾するからです。ええ、私は、他人がそう判断したらと考えると、文字通り恐れます。ダメ、ダメ、フレーベルがハンブルクに行くことは。

1849年8月末に、母に宛てた書簡で彼女は、「ハンブルクには、またもや、おじさまを味方にしようとする党派の人たちが多くいます」と書いている。女性協会と並んで、それは疑いなくドーリス・リュッケンスと彼女の一党だった。彼女らはフレーベルを得ようとしたが、ブレイマンは彼女らを「フリートナーのシンパ (Richtung)」と見なしていた。そのことは、アマーリエ・クリューガーがハンブルクからドレスデンのフレーベルに宛てた1849年2月23日の書簡のある箇所、明瞭に述べられている。

リュッケンスが本当に幼稚園を断念したとしても、何ら惜しいことではありません。彼女の活動はそんなに影響力をもってはいませんので。むしろ、敬虔主義者としての名声が高まるでしょう。ホフマンが同じことをしようとしても、彼は事態を進めることはできません。少なくとも、私がいるグループは、同調しません。新しく面識を得た人たちは、まず最初に、私にリュッケンスと同じ考えかどうかを聞いて、私が即座に否定するや、好意的な声を発します。

アマーリエ・クリューガーは、既に早くからハンブルクにいたに違いないが、ハンブルク滞在中の1849年初頭に、彼女は自身、自由信仰教団のメンバーでもあったが、ハンブルク女性協会のリーダーたちと親密な関係を結んだ。そして1849年3月16日に、ハンブルクからフレーベルに書簡を宛てた。

今晚、私たちはビュステンフェルト夫人のところで

会います。彼女のお嬢さんが私の幼稚園にいらっしやいます。女性たちは、ここで熱心にあなたへの関心を示します。だから、私が他のところで活動するかどうかなんて、とても言えません。スイスで私を待っている人がいます…少なくとも、私は、ここで起こっていることの全てを書き送りたいと思います。J・ゴールドシュミットさんは、あなたと知り合いになることを強く望んでいます。そして、あなたがすぐさま養成コースを開くことを望んでいます。このことについては、たぶん、私が説明に伺うでしょう。あなたのご活躍にとっては、冬がちょうどいいでしょう。ハンブルク人は夏は移住するので。今晚は本当に楽しかった…私たちは、あなたについて多くのことを語りました。トラウン夫人が宜しくと。そして、お知り合いになれて嬉しいとのことです。

この書簡では、3人の協会のリーダー(ビュステンフェルト、トラウン、ゴールドシュミット)の名があげられている。ゴールドシュミットは、どうも、既にフレーベルに協会の活動について知らせていたようだ。フレーベルは感激して1849年3月17日に彼女に書いた。

…協会の、すなわち女性協会の時代だ…協会は、このような素敵で、素晴らしく、長い間約束してきた、長い間待ち望んできた、希望し、熱望した時代をもたらしています…

アマーリエ・クリューガーは、すでに上述のところで、ほめかしたように、スイスに行った。彼女は、チューリッヒのカール・フレーベルの教育舎にある幼稚園の園長を引き受けた。その幼稚園は、1849年5月1日に、8名の子どもで開園した。カール・フレーベル夫人は、あのドレスデンのヨハンナ・キュストナーで、彼女はルードルシュタットの教員祭で女性解放を支持した。ヨハンナ・キュストナーは、アマーリエ・クリューガーと同じように、ドレスデンの養成コースの第一部に参加した。カール・フレーベルも当時は、ドレスデンに滞在した。アマーリエ・クリューガーを通じてハンブルクの女性協会は、女子専門学校を設立するというカール・フレーベルと彼の妻の計画を知った。その計画は、スイスの保守派の抵抗で挫折していた。1849年7月25日のチューリッヒからフレーベルに宛てた書簡でクリューガーは、ハンブルクでの計画の発展と、計画された彼との協働について述べた。

…私がハンブルクにいたとき、当地の婦人たちから、幼稚園を設置して欲しいと言われました。そのときは…私はこの申し出を…受け入れることは出

来ませんでしたし、受け入れてはいけなかったのです。何とかしようと、私はハンブルクを離れました。うまくいかなかったら、すぐ手紙を書いて冬には戻ってきますと約束して…でも、人生って、ときどき素敵なことが起こるのですね。チューリッヒに着いたちょうどその日に、私はヨハンナにこの計画を伝えました。そして婦人たちにお便りするようになされました。フレーベルは、専門学校設立のために手紙を添えました。たくさんの文通がなされた後で、婦人たちは大変感激して、このことに取り組むように思えました。だから私たちは十中八九、ハンブルクに行って、すぐさま何らかの問題を片付けます。私たちが冬に旅行することができれば、あなたとお会いできますね。もし、あなたが、親愛なるフレーベル先生と一緒に働いてくれて、私が園長を務める幼稚園を、あなたの実践的な訓練の実施に利用してくれるのなら、どんなに素敵なことでしょう…あなたと一緒に若い女性たちを教育するという素敵なことをいつも考えています。カール・フレーベルはあなたに和解の手を差し伸べようとしています。あなたはそれを払い除けてはいけません。あなた方は、全く離ればなれで活躍できるのです。ええ、まったく違ったかたちで。だから小さなことに拘ってはいけません。

1849年8月25日に、アマリエ・クリューガーはフレーベルに手紙を書いた。

昨日、私たちはハンブルクからの手紙で次のような知らせを受けました。当地では、幼稚園と専門学校をリンクさせるという点で、カール・フレーベルの提案が受け入れられており、しかも、私たちが11月には当地に集合することが望まれているのです。

女性協会の目標は疑いなく、その主導下で、フリードリヒ・フレーベルとカール・フレーベルのハンブルクでの協力を獲得することであった。ハンシュマン(Hanschmann)は、とりわけエミリー・ビュステンフェルトとベトラ・トラウンがフリードリヒ・フレーベルの思想に感激していること、そして彼に以下のことを求めたことを指摘した。

幼稚園を設立し、幼稚園女教師を育てるという自らの考えについて講演するために、半年間、ハンブルクに滞在すること…フレーベルは、無料で完全に賄い付き宿舎以外に、月々の謝礼として100ターラーを受け取る予定であるが、彼は招聘に応じる気持ちがあることを示した…女性協会は、女性の職業のための高度な教育を通じて、女性の地位が向上する

ことを求めた。それが、一方において、フリードリヒ・フレーベルをハンブルクに招聘する確かな理由であった。だが、そのような時に、フリードリヒ・フレーベルの甥っ子であるカール・フレーベルも…女子教育のための新たな計画を公表したが、彼の妻も、その計画を非常に感激して支持した。

「女子専門学校」の設立は大切なことだった。そして、このような計画に非常に与しやすい「女子教育協会」はこの考えに感動した。その結果、チューリッヒの教授と文通が行われ、協会の二人の幹部(たぶん、トラウンとビュステンフェルト)が旅立った。カール・フレーベルと彼の妻、そして二人の女性の間で、ハンブルクに招聘し、カール・フレーベルを引っ越しさせる詳しい計画が取り交わされた…二人の女性は、スイスからの帰路で、リーベンシュタインのフリードリヒ・フレーベルを訪ね、このことの詳細について話し合い、そして、そもそも彼と面識を得ようとした。(A・B・Hanschmann; Friedrich Froebel, 1875)

女性協会は、意識的に、フリードリヒ・フレーベルとカール・フレーベルの協力を模索した。上述した1849年8月25日の書簡でクリューガーは、述べた。

ただ問い合わせに対するお返事のみが、大切なことになっています。このことはあなた次第ですから。ハンブルクの人たちは、あなたが私たちのところで養成コースを開催すること、そして、同時に幼稚園を利用することを願っているのです。

事態は、女性協会やとくにアマリエ・クリューガーの思惑通りに進展したようだ。だから、ドイツ女性のためのハンブルク教育協会の幹事会(とくにB・トラウン、H・サロモン(Salomon)、E・ビュステンフェルト、J・フレーベル)が署名して刊行した『女子専門学校』のパンフレットに、「月曜日から金曜日の9～10時は、フリードリヒ・フレーベルによる幼稚園に関する講義のために空けておく」と明示されたことは、驚くにあたらない。また、1849年8月31日のフレーベルの書簡に対する返答としての1849年9月2日のクリューガーの書簡は、たとえフレーベルによって為された条件が顕著であったとしても、徹底的に楽天的に思える。クリューガーは次のように述べた。

あなたのお手紙が、私をどれくらい喜ばせたかを言葉で言い表すことなんて出来ません。私たちがハンブルクで反目し合うでしょうなんて、ちっとも考えることが出来ません。だから、あなたは全くあなた

のやりたいように為さってください。私は、何らの個人的関係が私たちを別れさすことはないと確信しています。でも、私は、あなたがそれでも、私たちのところにやって来ざるを得なくなることを願っています。同じ女性協会が、私に求めたことは、カール・フレーベル氏が11月にハンブルクに来られない場合、専門学校とリンクすることになる、そして30～40名の子どもたちからなる幼稚園を引き受けること、そして、あなたの生活の面倒をみることです。私は、あなたと一緒することがとても嬉しいことをハンブルクに書き送りました。でも、このことがフレーベル夫妻の協力のもとで行われ、カール・フレーベル氏が11月に到着した際に、あなたの賛同以外、何らこの計画に対立するものがないなら、なんて素敵でしょう。

最後のところは、全くもってフレーベルの意図するところではない。彼は、間違いなくカール・フレーベルの企画に「丸め込められる」ことを欲しなかった。そのことは、1849年9月14日のフレーベルの書簡への9月23日のクリューガーの書簡から明らかである。ただ女性教会は、フレーベルもそうだが、妥協を模索した。1849年9月8日の(フレーベルへの)書簡で「ドイツ女性教会のリーダー」(ミンナ・レッペ(Minna Leppoe)、パウリーネ・アルト(Pauline Alt)、ヨハンナ・ゴールドシュミット(Johanna Goldschmidt))は以下のように記した。彼女らは11月にフレーベルをお待ちすること。多くの参加者のために、宿舎が手配されること。そして彼女らは誓った。全ての協会員はフレーベルの思想に感激していること。専門学校に対する立場に関して、アマーリエ・クリューガーによって誤解が生じていること。フレーベルは、1849年9月13日付きの書簡で、信頼に感謝しながらも、約束は待つて欲しいこと、そして、彼は二人の男性に仕えることは出来ないこと、また「二役の活動」を考えうるよりも前に、まずは、目的、手段、方法、方策を知らねばならないことを指摘した。

1849年9月29日のヨハンナ・ゴールドシュミットに宛てた書簡でフレーベルは、バイトによって、「養成コース、幼稚園、そして私の住居のために、彼が非常に素敵なクラブハウス」を用意するという女性協会に向けられた提案に何らの異存がないことを書いた。「でも、もし私が隠居さんよろしく、部屋の中に閉じこもっていたら、みなさん私を覗き込みに来るでしょうね」。彼は、ミッデンドルフがハンブルクに現れることは有り難迷惑だった。たしかに彼はフレーベルを助けてきたが、フレーベルの将来の仕事に困難にする。「というのも、ミッデンドルフは人間性と同時に、飾り気のない真面目さと、乾いた汗と忍耐によって構成される血を示したからだ」。彼はゴールドシュミットが彼の活動の拠点を確保してく

れたことに感謝し、女性協会からの報告を待った。1849年10月23日の書簡でフレーベルは、ゴールドシュミットに1849年10月31日か、11月1日にハンブルクに到着するだろうと伝えた。11月1日に、最初の講演をとするならば、「もし可能ならば、私の甥っ子のレクタア(Rektor)がいる山村からはじめたい」。

フレーベルが、いかに、女性協会を越えて自由信仰教団と結びついていたかは、フレーベルがハンブルクで受け取った、ドイツ・カトリックの自由信仰教団のリーダーであるヨハンナ・ロンゲの書簡が示している。ロンゲはそのなかで、彼が自らの教団に、あらゆるところに幼稚園を設立することを勧め、その際、プレスラウ、ニュールンベルク、ハーナウを指名したことを述べた。彼が幼稚園設立を勧める理由は、「幼稚園に影響を及ぼしている神と人間についての思想が、自由教会が由来するところのものと同じだからだ」。彼はさらに、ドイツで彼によって設立された女性協会を三つの大きなサークル連合(Kreisverband)に組織し、ハンブルク協会に全体を指導させると伝えた。フリードリヒ・フレーベルは、トラウン夫人をロンゲの代理人と見なすように言われた。「ロンゲは、教育制度の問題に徹底して取り組み、その改良を彼は、明らかに社会的政治的状況の改善のための前提とみなした」と、コルベ(Kolbe)は確言している。このような、小市民的改良主義という点で、彼はフレーベルと間違いなく一致した。

ルイーゼ・オットーは、自らの『女性新聞』に、ハーナウから1849年の終わりに関する報告を載せた。それには次のように記されていた。

カール・フレーベル教授は、チューリッヒからハンブルクへの旅の途上で、夫人とともに、この地に立ち寄った。ハンブルクではロンゲが女子専門学校を設立したが、その運営はフレーベルと夫人が行う予定だ。協会は、いまや再び活発に活動し、私たち全員のなかに、ある意識的な精神的生活が蔓延している。ロンゲは…まさしくこの協会のなかで活発に活動している。

幼稚園は、いたるところで設置されるだろう。そして、春までにはこの地でも幼稚園の設立が実現するだろう。女教師はフレーベルによって養成されるが、もう、そのために幾人かが一若い女性や少女が一養成学校生徒としてハンブルク旅立った。

フリードリヒ・フレーベルは、養成コースと講義をはじめた — 最初の養成コースには22名が、講義には約100名が申し込んだ。専門学校は1850年1月にその活動をはじめるとのことだった。ヨハンナ・フレーベルは、1849年10月20日にちょうど内容案内として印刷されたものを、女性協会に書き送ったが、それはまたパンフレッ

ト『専門学校案内』として編集された。そこには、1850年1月から4月まで、また4月から10月までのカリキュラムがあり、そのなかでは、フレーベルの講義のために上述したように当てられていた時間に代わって、月曜日に幼稚園での実習が予定されていた。

例え、別々に活動していたとしても、フリードリヒ・フレーベルの養成コースや講義のみならず、カール・フレーベルの専門学校での行事も、幼稚園の理想によって担われていた。ヨハンナ・フレーベルは、そう、パンフレット『専門学校案内』で、「幼稚園の社会的意義」について書いた。カール・フレーベルは、序文の論考「新時代のための教育施設の事業」において、彼が「遊戯学校（Spielschule）名付けた幼稚園について詳細に述べている。カールの1849年6月19日の女性協会への書簡では、彼はとくに次のように述べた。

人間の本質を理解しようとする確かな一歩は、幼稚園での活動がかなえてくれます。その活動が、そのように考える対象と実践的に結びつけられている場合ですが。哲学的な見解と、心理的な解釈を、フリードリヒ・フレーベルの幼稚園は保持していますが、それがちょうど、子どもの本質を解く鍵となるのです。

『専門学校案内』には彼は次のように書いた。

女子専門学校、まあ、せいぜい女子のための教育舎ですが、だから、幼稚園での経験をとくに必要としています。幼稚園がその運営には多面的に教育された少女や婦人を必要とするから。幼稚園と専門学校は、結びついていて、そうすることによって、一つの全体へと結びつく教育協会となるのです。

フリードリヒ・フレーベルの養成コースのみならず、専門学校で学ぶ少女や若い女性にも、フレーベルの活躍に感激した信奉者がいた。専門学校で最も重要な生徒、マルヴィーダ・フォン・メイゼンブーク（Malvida von Meysenbug）は、自らの回想録で専門学校での生活を記し、フリードリヒ・フレーベルの思想に感激したことを記した。彼女は、他のドイツの諸都市と同じく、ハンブルクでも「女性解放の思想が教会の自由な運動によって成長した」こと、そして、自由信仰教団が48年革命以来、「巨大な高揚」を示したことを指摘した。彼女は、「勇気のある感動的な女性たち」が、ハンブルクに女性のための専門学校を開設したことを知った後、1850年10月に開校したこの専門学校に入学を認めてくれるようヨハンナ・フレーベルに手紙を書いて頼んだ。両フレーベルと、「5～6人の若い女性たちと、彼女らはとくに学校を卒業して、他所からやって来ていました…そして彼女らは家に住んでいました」、そしてエミーリエ・ビュス

テンフェルトとの最初の出会いについて彼女は、「まるで家にいるように感じました」と書いた。とくに彼女は、ビュステンフェルトの計画に感激した、というも、彼女はここで彼女の夢が実現すると思ったから。

女性の経済的自立は、その発展によって次のような人間になることを可能とします。つまり、まず自身が目標であり、自由に自らの本性の欲求や能力を求めて成長しうる人間です—そのことが原則であり、この原則にこの学校が基づいているのです。（メイゼンブーク『回顧録』1899）

彼女は、受講生のなかに多くの「受講料免除者」がいたこと、多くの「都市のご婦人」が講義を聴きに來ていたこと、そして時々、「祖母、娘、孫娘が同時に教室の机に座っていたこと」に感激した。重要なことは、メイゼンブークが、フリードリヒ・フレーベルの活動や専門学校で進められている活動を感動しながら評価し、自ら政治的活動や自由信仰教団や女性解放の活動に位置したことである。

学校には、幼稚園と初等教育クラスがありました。ここでは、幼稚園教員や初等教員になりたいという若い女性が、実習をしました。また、天才的なフリードリヒ・フレーベルによって見いだされた幼稚園制度は、ドイツでは政治的、宗教的運動と同時にあったという間に広がりました。私はそのことについて聞いてはいましたが、ここではじめてその実際を目にして、とても感動しました。教育は、ほとんど誕生とともにはじめられねばならないとするフレーベルの根本思想に、私は全く同意します。だから、ほんとうに最初から子どもを教育しようとする母親はみんな、彼の思想を知らねばならないでしょう…少女や女性のみが幼稚園の責任主体となるべきこと、フレーベルはそもそも子どもの最初の教育を女性の手にお任せすることを欲していたことは、またもや私にとっては喜ばしい考えでした。私たちの専門学校には、また、特別な幼稚園教員養成コースがありましたが、この素敵な規定は、私にはまったく特に若い女性のためのものであるように思えました。フレーベルのシステムが基礎となっていて、彼の独特の価値が存在する原則を、私はまったく、心理的に深く、精神的に十分に見いだした。表面的な観察者は、ただ、ちょっとした活動や見せかけで納得するのでしょうか。だから、とくに子どもの傾向、自己活動、創造衝動を目覚めさせること…同様に重要だと思うので、彼がリズムや音楽による運動遊戯を指導したことを添えます…私は、このようなフレーベルのシステムを知ってはじめて、本当に幸せだと

思いました。(同上)

カールと同じくフリードリヒ・フレーベルも、ハンブルク・ドイツ女性協会のリーダーといった進歩的女性たちや、また当地の自由信仰教団によって高く評価された。

「私は、少数の友人たちと、ここで、フレーベルの話しに全く食らい付いている人たち、新カトリックや新イスラエル、それ故自由教会といった様々なグループのなかにいます」と、ディースターベークは、オーソドックスで敬虔主義的な傾向をもつフレーベルの崇拜者について述べた。(Müller 1929)

1850年のはじめに、またもや、フリードリヒ・フレーベルの講座と、専門学校でカール・フレーベルによって指導されている講座との関係についての論議が起こった。だがそれは、女性協会によって巧みに調停された。そのことでたぶん、一つには、カール・フレーベルは、「専門学校」のパンフレットで、自らの叔父について、専門学校について「詳細な情報」を伝える予定の人たちの一人と述べた。もう一つには、1850年1月10日の「田園紙」(Dorfzeitung) 第10号で、次のような記事が見られた。

ブランケンブルクのフレーベルの提案で、そしてどうやら彼の指導で、ハンブルクに女子学生のためのある種の「専門学校」が設立されるということだ。女子学生たちは、そのことをとっても喜んでる。

フレーベルは、それについて書いた。「ここに私は編集者に送られた1月20日付の校正をもっています」。記事の一部には、こう書いてあった。

注釈。誤解をさけるために、注意すべきことは、昨今ハンブルクに設置された女子専門学校は、フリードリヒ・フレーベルによってではなく、カール・フレーベルによって実現されたのである。フリードリヒは、この学校への関与を拒んだ、というも、この学校は根本原則において彼のものとは徹底的に一致しないからだ。

この内容は、W・ランゲによって強調されているが、以下のことから推測するに、フレーベルがそう書いたかどうかは疑わしい。女性協会がたぶん釈明を頼んだのだろう。小さな、ほとんど読めないようなメモ書きに、女性協会へのフレーベルの書簡の下書きがある。そこで彼は次のように、はっきりと指摘している。彼は、決して専門学校について何らかの欠点を言うつもりはなかったこと、専門学校の聴講生も彼の講座に速やかに参加して欲しいこと、そして、甥っ子との仲違いは個人的な理由

であること。

日付のない、おそらく1850年1月末の書簡で、協会はフレーベルが1850年1月20日の協議に参加できなかったこと、とくに、1850年1月7日のトラウン夫人宅での会合で「フリードリヒ・フレーベルの業務のための委員会の設置」について、間違っただけで公表されなかったことを悔やんだ。その委員会には、「常任女性委員」マインツァー (Mainzer)、ゴールドシュミット、ブルマイスター (Burmeister)、ダービッド (David)、レップポエ (Leppoe)そして、「非常任女性委員」ゼルベルク (Selberg) やヴィンドミューラー (Windmueller) がいて、彼女らは、フレーベルが負わされた債務を補完すること、会合でその報告をすることを事業とした。だから、いかなる争いも生じ得ないこと、誤解が取り除かれると考えていると述べてある。この書簡には18名の署名がある。そのなかには、B・トラウン、E・ビュステンフェルト、J・ゴールドシュミット、H・サロモン、H・リー (Ree)、L・デトマー (Detmer)、Ch・パウルゼン (Paulsen)、P・アルト (Alt)、M・レップポエ。

フリードリヒ・フレーベルと女性協会がどれくらい親密に協力したかは、1850年3月5日に、協会のクラブハウスにおける最初の市民幼稚園の設立がきちんと示している。ディースターベークは、すでに1850年2月24日に、「ハンブルクにおける最初の市民幼稚園設立に際して両親に祝辞」を送った。フリードリヒ・フレーベルの思想と結びついた民主的傾向は、すでに、規約の第1章で明瞭となる。そこにはこう書いてある。

- 1) 最初の市民幼稚園は、すべての階層のための教育舎である。
- 2) 子どもの教育方法は、フリードリヒ・フレーベルの著作や講演のままに、そして彼による幼稚園での実践のままに… (略)
- 4) 教育舎は5人の男性と、5人の女性からなるリーダーの下に置かれる。彼らの職業はそれぞれ別である…幼稚園女教師の選出や、教師助手の雇用は、このリーダーたちによる。

Dr. デトマーは、ハンブルクの実科学学校の校長で、妻は女性協会のリーダーとして活躍していたが、彼は1850年6月2日に、「役員会の代表」として全体集会で報告した。彼は、社会的状況から幼稚園の必然性について強調し、保育所と幼稚園の違いについて浮かび上がらせた。そしてフレーベルを評価し、とくに遊びの意義に理解を示した。彼は、宗教教育については何も言わない一方で、幼稚園の国民的意義や、—フレーベルの意味で—解放のかたちとしての幼稚園女教師の労働を強調した。

人は今日、女性の解放について多くを語ります!

ここに彼女らのフィールドがあります。ここで彼女らは価値のある解放に手を出すことが可能なのです。ここは、闘いの場所です。ここで彼女らは勝利を得ることができるのです。この勝利は、血まなぐさい戦場での男性たちの行い全てにまさって素敵です。

1851年、ディースターベークはこの幼稚園の特徴について書いた。

国民的市民的幼稚園は、当地のハンブルクで、そう最初の花を咲かせた。みんなは第二番目の花を咲かせることを考えている。幼稚園の事業が、市民や国民たちに浸透するなら、きっと美しい実がなるだろうし、彼女らを覆っている貴族的な装いも取り払われる。彼女らは、自らの本性や資質に反して、ここやそこで、そんな装いを身に付けてしまっている。幼稚園の事業、人生で最も重要な段階における子どもたちが発達に即して教育される活動の事業は、国民にとっての事業で、全国的な事業になるに違いなく、今日までの保育所を変革させ、進歩させる（『女性教育協会について』）。

最後に確認しておくことは、フリードリヒ・フレーベルは、カールやヨハンナ・フレーベルとともに、ハンブルクでの自らの活動によって、女性の解放を目指したドイツで最も積極的な女性協会の一つを支えたということだ。マリエンタールの模範教育舎（Musteranstalt）の設立によって、幼稚園女教師は、本当の意味での職業として成立した。この教育舎では、未来の幼稚園女教師の養成が—もはや、様々な場所での養成コースでは、そうではないのだが—計画的に行われ、そして、学校での成績証明書を授与することで終了した。フレーベルの女性協会設立に関する貢献、とくに、事業の宣伝や経済的確保に関しては、模範教育舎の設立と同様に、女性解放に関する彼の特別な貢献の頂点であり最終点であった。それは、とくにまた、個人的関係を通じて、小市民民主主義の活動に対するフレーベルの結びつきに関する一層の証明だった。

フレーベルの「模範教育舎」に関する根本的に広範なかたちの計画は、まったく制約が多いように受け止められたが、彼にとっては実現可能なものだった。

とはいうものの、さしあたり、この模範教育舎の所在地、そしてそれとともにまた特徴に関して様々な見解があった。

ヘンリエッテ・ブレイマンは、すでに引用した1849年3月22日の書簡で、ルイーゼ・レヴィンに次のように述べた。

あなたは、私の意見、それは忠告ではありますが、決して強制ではありません、それをきちんと聞いてくれますか。フレーベルは家族の一員であり、自然の一員なのです！彼はあなたと結婚すべきなのです、そしてあなたとマリエンタールか、そうでなければ希望するところへ行って、幼稚園を設立して、そこで夏も冬も養成コースをもつべきなのです… そんなに大仰しく考えなくても、簡単にはじめることは可能なのです。

他に、フレーベルの弟子オットィリエ・シュミーダー（Ottillie Schmieder）と同じく、ディースターベークの弟子カール・ロールバッハやベルタ・フォン・マーレンホルツ＝ビューロー男爵夫人は、教育舎の事業について他の意見をもっていたが、それは、さしあたりディースターベークも持っていたようだ。ロールバッハは、1850年2月17日の書簡の後で、フレーベルとベルリンで出会ったが、1850年3月17日にフレーベルに手紙を書き、模範教育舎の設立について次のように述べた。

私たちの多様で十分な検討によると、ベルリンか、他の大都市に設置されるべきです。なぜなら、そこでのみ、より大きなコミュニケーションによって成功が可能だからです。それで私はさりげなく聞いたのですが、あなたはすでにマリエンタールに模範教育舎を建てるおつもりだとか。そのことについて私は次の人たちとお話ししました。フォン・クノーベルスドルフ（Knobelsdorff）夫人、Fr. シュミーダー、フォン・マーレンホルツ＝ビューロー夫人、プファイファー（Pfeiffer）嬢、そしてディースターベーク。他には、あなたは名前をご存じありませんが、私を通じて模範教育舎の事業に並々ならぬ関心をもっている多くの方々。彼女らみんなと私は昨日、状況を話しましたが、みなさんが言うことは、大都市においてのみ、模範教育舎の事業をはじめることが可能だということです。後には、私がマリエンタールだと思ったように、このような素敵な地方に、教育舎を建てたり、移したりすることはむしろ望ましいことでしょう。ですが、最初は、このような辺鄙な田舎で、はじめてはなりません。教育舎を維持することは出来ないでしょうし、大切な事業も、それによって、致命的な失敗となるでしょう。なぜなら失敗は、ますます重要となる事業にとって最も致命的だからです。だから私たちは確信します。最初の教育舎設置は、ここか、他の大都市で為されねばなりません。私たちは、聖なる事業について、このような賢明な用心深さに責任があるのです。

それよりも一日前の1850年3月16日に、オットィリエ・

シュミーダーは、マリエンタールは、ドレスデンでは不都合だと見なされていると述べた。彼女が滞在しているベルリンについて彼女は、同時に述べた。

あなたの最近の計画について、ここで私が思うことは、あなた自身が望んでいるような有効さは、少なくともある一面ではないことです。差しあたりあなたは、添付されているマーレンホルツ夫人のメモをご検討ください。そこには、模範教育舎はマリエンタールでは成功しないと考えられるとあり、その教育舎はここベルリンか、大都市においてのみ、実現されうると考えられているとあります。

しかしながら、同封したマーレンホルツが立てているベルリンでの計画は、まあ、実現されないでしょう。彼女は、ディースターベークがこの計画に同意していると思っておりますが、それは違います。ディースターベークは、目下のところ、ベスタロッツ基金と幼稚園を結びつけようとはしていません。幼稚園について彼は、ゆっくりと拡がればいいと思っています、その事業のための人も徐々に獲得すればよく、とにかく全てはまあ、自分の力で発展させればいいと思っていますのです…ところでディースターベークは目下のところ、自らの状況のために、全ての政治的振る舞いを恐れています。そして彼は、ベルリンは模範教育舎の理想にとっては、まだとてもそれに応じられるような場所ではないと主張しています。だから、この際、ディースターベークの支持は当てにすべきではありません。私たちはずいぶん、彼と繰り返し話し合いました。マーレンホルツ夫人は、彼女の雄弁さの全てを投入して、あなたの教育システムを持続的に設立させるためには、模範教育舎が差し迫った必然であると彼を説得させようとしたのですが、彼は動きませんでした。

オッティリエ・シュミーダーを我々は、女性解放の決定的なリーダーとして認識しているが、「ハンブルク女性協会」と同じく、ディースターベークにとっては何ら共感的なパートナーではなかった。

ディースターベークは、1850年3月28日の書簡でフレーベルに次のように述べた。

シュミーダー夫人が、私について書いたことを、私は言い当てる事が出来ます。誤解、冷淡、不実があることは、彼女の目を見れば分かります。私は、そのことで自己弁護するなんてことに価値を見いだしませんでした。私は、あなたの前には違う諸問題が横たわっていると思います。それらは、私があな

たと、あなたの事業について考える通りに表れています。私が言いたいことは—そのご婦人は、すべての公平さを失ってしまったような熱狂と執着をあなたの事業に対して示しているということです。だから私は彼女を幾ばくかクールダウンさせることを試みなければなりません。なぜなら親愛なるフレーベル、似たような人たちが私たちを害するのですから。

いつもは非常に気が合うマーレンホルツ夫人の考えや態度であっても、ディースターベークは全く同意できない。ディースターベークは、この書簡で、「ベスタロッツ学校」に幼稚園をリンクさせ、「その実践を通して仲間を得る」という自らの上述された計画を確認している。この方法は、愚鈍なものであるが確実だ。あせっては、場所としては非常に悪くなっているベルリンでは危険なのである。

彼の計画を支持するためにフレーベルは、1849年12月1日には、ハンブルクから、ヴィヒャルト・ランゲによって編集された既述の「週報」の購入に関する呼びかけを、同封した計画とともに送付した。第一号は、1850年1月7日に刊行された。ファルンハーゲン・フォン・エンゼ(Varnhagen von Ense)がこの刊行誌について述べた意見が面白い。1850年4月5日、それについてローバハがフレーベルに書いた。

ファルンハーゲン・フォン・エンゼは、昨日、マーレンホルツ夫人のところに行きましたが、私たちの事業に強く共感しました。しかし彼は、週報のスタイルをもっと大衆化させること、出来るなら、全ての哲学的表現を捨て去ることを助言しました。というのも、哲学的表現によって事業が全く消え去ってしまうからです。というのも、とくに女性たちにとってそれは、何らの価値もなく、週報を読むのは大抵は女性たちだからです。哲学は無くて、事業のみあればいいのです。このような警鐘は、しばしば私は耳にします。人は、人間をあるがままに受け止めるものですよ。あなたの論考は、人々にはあまりに高尚過ぎます…またファルンハーゲンは、タイトルを、フリードリヒ・フレーベルの教育活動のための週報と変えることを望んでますよ。

疑いなく女性解放への寄与を示したフレーベルの素敵な考えは、自らの活動を宣伝するための女性協会の設立だった。計画された模範教育舎を物質的に支えるために、いま、この協会を設置することは、シュミーダー、ロールバハ、そしてマーレンホルツの特別な関心事だった。模範教育舎の場所の決定が問題となった。1850年5月にフレーベルは、マリエンタールの小城に引っ越した。シュ

ミーダーは、1850年3月16日のベルリンからの書簡で、ディースターベークとの話し合いが失敗した後、彼女はマーレンホルツ夫人やクノーベルスドルフ夫人やロールバッハと模範学校のための募金を成し遂げることに、マリエンタール以外を指定すること、というのも人は、模範学校の利益を田舎ではなく、すべてのドイツ人のために為したいと思っているからと結論付けたことを述べた。ロールバッハは、1850年3月17日の書簡で、マーレンホルツ夫人の下での上述した人たちの、ちょうどいつもの集会について、「彼女らは、私を引き入れて、女性協会の設立のために働き、公的にそれを支持することを欲しました。女性協会は、あなたの考えに応じた模範学校設立のために会費によって基盤を作ろうとしています」と述べている。彼は、自らの同志と約30名の女性を獲得できればと願っている。他の書簡から明らかなように、協会の設立は、まだなお待たされたことだった。ロールバッハは、女性たちに、マーレンホルツの支持に従うように説得しなければならなかった。他には、1850年4月14日の書簡で、やっと「本当に事業に尽力しようとする女性が8名」になったとあった。

1850年5月3日の書簡ではじめてロールバッハは、伝えることが出来た。

この手紙に、私の活動としてははじめて、マリエンタール支援として70ターラーを添えます。ちょうど今、協会員がはじめて集まって、あなたにこのお金を送ることを決議しました。まあ、一度だけという集金で集まったものですが、たった12名によるものです。継続的な集金ということになると、もっと少額になります……

その間ロールバッハは、この協会のための規約を起草し、草案をフレーベルに送り、それから、檄文を備えたこの規約を、「フリードリヒ・フレーベルの教育活動のための協会」というタイトルで印刷させ、「プロイセンのリューゲン(Ruegen)侯国」ならびにドレスデンのシュミーダーに送った。この規約によると、この女性協会はフレーベルの思想を広めること、マリエンタールの模範学校を活性化させることを責務としていた。例えば、「若い女性をマリエンタールに行かせて養成するとか、集会などをもつことによって」だ。6人のメンバーによる委員会がリーダーとなるものとされた—3名の女性と3名の男性。この場合、彼らは(!)、「対外的には協会の代表となり、内部業務ではリーダーとなり、集会では議長となる」ものとされた。地名の表示は放棄され、「設立日」として「1850年3月内」とのみ印刷された。檄文の僅かな行は、規約に移る次のセンテンスで締められている。「ここにおいても、女性たちは以下の条項のもとに

団結した」。協会への加盟は、規約に署名することで認められるものとされた。手元にある活字になった本は、シュミーダーによって、「ドレスデン」という地名表示をしながら「委員会の名前で」署名されており、フレーベルによってクレームがついた命名を、彼女は変更した。1850年4月9日のドレスデンからフレーベルに宛てた書簡で彼女は、「大変ご親切にもお送りいただいた規約は……マリエンタールのために、ここドレスデンに集まっている同志たちに徹底的な共感」を得るものであったことを述べた。彼女は、規約集をウィーン、ハンブルク、ライプツヒヒ、マグデブルクそしてたぶんニュールンベルクにも送った。

これらのように、フレーベルに依拠し、少なくともフレーベルによって支持された幼稚園女教師養成活動が、いかに、女性解放に対する重要な貢献として高く評価されたかを、1850年4月10日のフレーベルに宛てたドレスデンからのシュミーダーの書簡にある内容が示している。そこにはこうある。「誰が私以上に感激できるのでしょうか—あなたが、前々回に私に送ってくださったとても素敵な手紙でおっしゃっていたように—この新しい活動で女性の重要性がどれくらい基礎付けられたのでしょうか、幼稚園によって子ども時代が評価されているのと同様に、どれくらい、女性がそのあらゆる能力や素質を認められることによって評価されているのでしょうか。そして、全き理想が女性をあげ評価しているちょうどその間に、個々人の活動の成果が、そもそも女性の成果とみなされるなんて、なんと素敵で感動的なことでしょう」。

しかしながら、これらの活動は、その小市民民主主義的活動の表出ゆえに、革命の挫折後はなんと、第一級の政治課題となった。既述した活動に多かれ少なかれ参加した個々人の反応をみると、再び次のことが明らかとなる。つまり、フレーベルの教育活動には進歩派と同様に、反動派も同じように関心を示したが、彼の活動は—女性解放に対するその貢献に関しても—常に政治的に評価されるということである。だから私たちは、1851年の幼稚園禁止令の前夜に進むのだ。

本稿は、Helmut König : Friedrich Fröbels Verbindungen zur kleinbürgerlichen Demokratie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Teil III. IN : Jahrbuch für Erziehungs- und Schulgeschichte 26/1986 Berlin 1986. を邦訳したものである。筆者は、1988年4月15日にケーニヒ本人から直接邦訳の許可を得ている。なお、紙幅の都合から註釈の全てを削除した。邦訳することの意義は、本誌掲載の拙稿「ヘルムート・ケーニヒとフリードリヒ・フレーベル」において記した。